仏教思想における人為と自然

――浄土教的立場から「いのち」「人間」「環境」を考える――

谷川理宣
（九州龍谷短期大学）

一　はじめに

「仏教思想における人為と自然」ということは、浄土教的に言い換えれば「自力」と「他力」ということである。特に人間的な自力のはからいを徹底的に排除して、絶対他力真実の阿弥陀如来の本願の救済の道を明らかにされたのが親鸞聖人である。

本論では、絶対他力の真実世界（自然）と相対有限の人間の自力のはからいの世界（人為）という、二つの世界が「二重構造」になっているという認識を基にして、浄土教（特に親鸞聖人の教え）の救済構造を、「いのち」「人間」「環境」（世界）という観点から考察を試みてみたい。

二　世界は二重構造ということ

仏教は本来「出世間」の教えである。迷いの世界であり、それ故苦悩する世界である「世間（三界・六道輪廻の世界）」を超出する道（解脱）を明らかにするのが仏道である。このことは主な経典には必ず表明されている。例えば、

於是、法蔵比丘、具足修満如是大願、誠諦不虚、超出世間、深楽寂滅。（『大無量寿経』真聖全Ⅰ・十四頁）

三界無安、猶如火宅、衆苦充満、甚可怖畏、常有生老病死憂患、如是等火、熾然不息。（中略）以是方便、為説三乗、令諸衆生、知三界苦、開示演説、出世間道。」（『法華経』譬喩品・大正九―十四c）

いずれも、世間・三界の世界は「苦悩の世界」「虚妄の世界」であるから、真実世界である無漏・涅槃寂静の世界へ超出すべきことを説いている。

その出世間、つまり解脱するということはどういうことか。そのことについて、ある講座の折に、受講者の方から「究極のところ、仏教は何を目指しているのですか?」という質問を受けた。私は、「仏教の究極の目的、目指すところは、私達が今生きている、自分の思いで造り上げた世界（世間・シャバ・生死の世界・此岸）を超えて、絶対真実の世界・私達の思いを超えた世界・次元を異にした世界（出世間・浄土・彼岸・不可思議世界）があることに目覚め、その世界を自己の立脚地として生きる私になることです。そのことを仏教的表現で言えば、〈解脱する〉とか、〈出世間〉とか、或いは浄土教的には〈往生浄土〉と言います。その目的を私の上に如何にして実現するかという道筋が〈仏道〉として説き示され、明らかにされてきたのです。その究極の目的が、私の上に成就したことが〈成仏〉ということです」と答えた。

要するに、出世間ということは、私達が生きている世間という狭い小さな自我の枠で覆われた世界を破り出て、真実世界に目覚め、その世界を生きるということである。そのことを考える上で、「世界は二重構造」として把握することが大事なことだと考える。

その「世界は二重構造」ということについて、仏教で「世界」を表わす言葉を、相対立する世界の関係でいくつか取り上げて見る。

「出世間＝世間」「浄土＝穢土」「涅槃＝生死」「無為＝有為」「彼岸＝此岸」「絶待（絶対）＝相待（相対）」「他力＝自力」「自然＝はからい」など。

これらは、上位が「絶待無限の世界」を表わし、下位が「相待有限の世界」を意味している。この関係構造の在り方は、私達が生きている相待（対）世界に立って見た場合と、仏・如来の絶待世界から見た場合とでは異なる。

私達が普通に理解するとき、例えば、「浄土」は「十方億仏土の彼方」にあるというように、遠く離れた世界として捉える。しかし絶待世界ということは、本来の言葉の定義から言えば、相待（対）世界を超越しているということである。それは、自分の外に、遠く離れて相対（あいたい）して存在しているということではない。自分を超え包んではたらいている世界という意味である。『観経』で、「阿弥陀仏、此を去ること遠からず」と釈尊が言われるのは、絶待世界の中に相待世界が包まれてあるということである。それを私は「世界は二重構造」であると言うのである。

三　親鸞聖人も世界を二重構造として把握

親鸞聖人が世界を二重構造として把握されていることを明確に示す文がある。

他力のなかには自力とまふすことはさふらふときき候ひき。他力のなかにまた他力とまふすことはきき候はず。他力のなかに自力とまふすことは、雑行・雑修・安心念仏をこころがけられてさふらふひとびとは他力のなかの自力のひとびとなり。他力のなかにまた他力とまふすことはうけたまはりさふらはず。（『末燈鈔』真聖全Ⅱ・六八三頁）

「他力」の世界の中に「自力」の世界が含まれている。即ち絶待無限の「他力」の世界には、当然相待有限の「自力」の世界が含まれている。しかし、「他力」の世界は絶待無限の世界だから、その中に別に「絶待他力」の世界が存在することはありえない、と明確に述べられている。

また『浄土和讃』の中にも、絶待世界と相待世界の関係を表わされた和讃が多く見うけられる。

「智慧の光明はかりなし
有量の諸相ことごとく
光暁かふらぬものはなし
真実明に帰命せよ」（真聖全Ⅱ・四八六頁）

「解脱の光輪きわもなし
光触かふらぬものはみな
有無をはなるとのべたまふ
平等覚に帰命せよ」（真聖全Ⅱ・四八六頁）

「智慧の光明はかりなし」「解脱の光輪きわもなし」などと詠われる絶待無限の光が、「有量の諸相ことごとく」

「光触かふらぬものはみな有無をはなる」というように、有限相待の煩悩に執われた一切の存在をすっぽり包む光となってはたらいているのである。このように親鸞聖人も、世界を二重構造として認識し、捉えられていると言えよう。

四　「世間」的世界を造り出すもの

世界の二重構造を構成するところの「世間の世界」は何故存在するのか。そのことについて仏教では、すでに「四諦」の教えの中で、「迷いの世界」を造り出す根本原因として人間のもつ「煩悩」による強い欲望を上げている。初期仏典はさらに十二支縁起を説き、私達の苦悩と迷いの根本原因として「無明」という、煩悩・愛欲に眩まされて「真理」を知らず、「真実」に暗いあり方を指摘している。

それは人間の自我意識、即ち虚妄分別、浄土教的に言えば「自力のはからい」によって造り出されるという。私達は、自己の認識したものを真実だと認識する。しかしそれは虚妄分別の認識であり、そこに人間が造り出した世界、認識した世界が生じるのである。その世界を真実在として認識することが自力分別知の世界、即ち世間である。そこに自我執着の心があるとするのが仏教の世界認識である。そのことを仏典では、「三界唯心、但是一心作」（『華厳経』大正九・五五c）・「三界唯心」（唯識二十論』大正31・七四b）などと説き、また「三界」「六道輪廻の世界」「五濁悪世」などと言い表わす。要するに「世間」の世界は煩悩によって汚された世界、常に自我執着が付いて回る世界である。

五　「人間」についての認識

仏教は、人間も二重構造として捉えているといえる。「思いの自分」と「真実の自分」、或いは「煩悩を持った私」と「仏性としての自己」、「自我意識の存在」と「無自性空なる自己」など。人間の思いの及ぶ範囲で捉えた人間存在とは、言わば「閉ざされた人間」である。その「閉ざされた人間」を包み支えている「無限に開かれたいのちの存在」がある。それが「真実に目覚めた自己」である。人間存在は、本来この二重構造として捉えられると思われる。

1・人間の理性・知性に立った人間理解

人間は「万物の霊長」であるとか、「人間は考える葦である」（パスカル）というように、人間存在を他の生物と区別して勝れた存在であるとする理解が西洋近世以降強くなってくる。ニーチェの「神は死んだ」という言葉は、人間至上主義を表わす言葉として有名である。

私達は、自分の思いで「自分」というものを考えている。「自分の思いの世界」がすべてであるから、自分中心に世の中は回っているはずだ。自分以外の存在は、自分が生きるための手段であり、道具に過ぎない。自分を生かしている絶待無限の存在とか、自分の思いを超えて世界があるなど及びもつかない。むしろこの科学時代にそんなことは有り得ない。科学的証明がないものは存在しないと考える。それほど人間の知性が生み出した「科学的思考」があまりに有効であったために、それを絶対化して信じているのが現代の人間である。その思いの中で「自分のことは自分が一番分っている」と考える。表層的な人間理解である。仏教的に言えば、自我の思いに縛られた「迷いの相（すがた）」である。しかも、なお悪いことには、そういう自分を正当化（善人意識）して、自己の罪悪性（真実に暗いこと）に無自覚

であることである。それが人間の持っている闇である。

2．真実の光に照らされて見えた私

私達は、自分の存在の有り様の全体を自分で知ることは不可能である。対象的知・分別知の限界がある。そういう私達が自分の全体の本当の相を知るには、どうしても私を超えたところから私の全体を照らし出し、知らせてもらう以外に方法がない。「仏・如来」というのは、私達の思いを超えてはたらいている絶対無限の存在である。その「仏・如来」は、私を超えたところから、真実の智慧と慈悲の限りを尽して、私達に「真実の自己のありのままを見よ」と、私の相全体を底の底まで照らし出し、教え示して下さるのである。

その「仏・如来」の光に照らされて、自覚された自己の姿を、親鸞聖人は種々の著作に書き残されている。例えば、

「浄土真宗に帰すれども
　真実の心はありがたし
　虚仮不実のわが身にて
　清浄の心はさらになし」

「外儀のすがたはひとごとに
　賢善精進現ぜしむ
　貪瞋邪偽おほきゆえ
　奸詐ももはし身にみてり」（『愚禿悲歎述懐』真聖全Ⅱ・五二七頁）

凡夫といふは、無明煩悩われらがみにみちみちて、欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむこころおほくひ

まなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。

（『一念多念文意』真聖全Ⅱ・六一八頁）

その自覚は同時に、「身を持った私」という「身」の自覚をももたらす。それは「他のいのち」を奪わなければ生きられない自己の自覚である。仏教的に言えば、それは誰からも許されているわけではない。「殺生罪」である。しかし、そうせずには生きていけないのが「わが身のいのちの事実」である。それを当り前にしていることが「罪」なのである。親鸞聖人は、そういう我が身を自覚して、「無慚無愧のこの身」「小慈小悲もなき身」「いづれの行もおよびがたき身」などと慙愧されている。

仏・如来によって知らされた私の真の相は、当に「真実そのものに背いている私」であり、「仏・如来に背いている私」ということである。その深い自覚が『歎異抄』第三章にいう「悪人」の自覚であり、また罪悪深重・煩悩具足の凡夫の自覚である。

この「出離の縁無き身」の自覚は、同時に「仏にかならずなるべき身」（如来の本願により）の自覚ともなる。

生死の苦海ほとりなし
ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける（『高僧和讃』真聖全Ⅱ・五〇二頁）

親鸞聖人にとって、それは弥陀の本願である第十八願文に付属されている「唯除の文」の了解、即ち如来の救いから「除かれるのはこの私であった」という自覚となる（機の深信）。そこに同時に「如来の救いの光」に出遇ったと

いう世界がうなづかれている（法の深信）のである。それが「如来よりたまわりたる信」といわれるものである。

六　「いのち」について

私は、「いのち」も二重構造として捉えることが大事だと考えている。いろんな「いのち」についての把握の仕方があると思われるが、ここでは基本的に「人間の理性・人知で捉えたいのち」（人間の思いのいのち）と、「人間の理性・人知を超えてはたらいているいのち」（真実のいのち）の二つである。

1．人間の思いの中のいのち（＝私に取り込まれた「いのち」）

一般的に言えば、「いのち」についての理解は、「生物学・生理学上のいのち」「医療で理解されるいのち」のように、客観的・対象的「いのち」と、「自分で意識している自己のいのち」「私の身体的いのち」のように、自己の主観的な「いのち」が考えられる。それらは、いずれも人間の知性で捉えた「有限のいのち」であり、従って枠のある「閉ざされたいのち」といえる。

その「いのち」の理解には「生」のみがあって、「死」は排除されている。それは直線的平面的な「いのち」の理解である。誕生が「生」の始まりであり、「死」は生の終りである。その間が「いのち」の世界ということである。身体的生死観ともいえる。

この「真実のいのち」の世界に根拠をもたない、その世界と切れた「いのち」は還るべき帰依処が無い。従って、その「いのち」は生死を繰り返すしかない。流転輪廻の「いのち」である。同時に「真実のいのち」の世界と切れているから、つながりを失っている。個々バラ〳〵の「いのち」である。そういう「いのち」のあり様を仏教では「迷

いのいのち」という。

2．人間の思いを超えたいのち（＝形なきいのち・自然（じねん）のいのち）

私達の身を持った「いのち」、有形の「いのち」をこの世に生み出し、根底から支え生かし続けている私達の思いを超えたはたらきの世界がある。その世界を「真実のいのち」の世界という。「形なきいのち」の世界であり、「自然のいのち」の世界である。その「いのち」は無限のつながりを持った「いのち」であり、また無限の拡がりを持った「いのち」である。

そのような「いのち」の世界を、浄土の教えでは「阿弥陀の本願」の世界といわれる。その「真実のいのち」は、人間が「真実のいのちの世界」があることを忘れ、或いは見失なって、流転し苦悩していることを悲歎して、「真実のいのちに目覚めよ」と呼びかけ、「真実のいのちの世界（浄土）に生まれる私になれ」と願っているのである。その願行のはたらきの世界を「阿弥陀の本願」という。

自我の思いの「いのち」、閉ざされた「いのち」の世界を超えて、「真実のいのちの世界」「無限に開かれた阿弥陀の世界」へ往生することが「真実のいのち」の世界から願われているのである。それが「いのち」の二重構造ということである。

七　環境世界＝浄土と穢土

私達が今生きている世界も「浄土」と「穢土」という二重構造として理解することができる。「浄土」とは、人間の思いを超えた世界、「絶待無限の世界」「絶待他力の世界」である。「穢土」とは、人間の思いの世界、即ち「自

我・煩悩で汚された世界」「自力の世界」である。穢土の世界は人間の思いで造り上げた世界であるから、有限相待の世界である。その世界を絶待無限の浄土がその中に包み込んでいるのである。

1・穢土＝人間の思いの世界

人間の思いで造り上げた世界を、仏教では「（俗）世間」とか「娑婆」という。また六道、三界や五濁悪世とも規定している。その世界は有限ないのちの世界という意味で「生死」の世界といい、それはそのまま「迷いの世界」であることをも意味している。

そのような世界を造り出しているのは、煩悩に汚された「自我意識」であるという。その世界は有限であり、人間の思い、認識の届く範囲内に限られる。そこに強い自我の枠がはめられている「閉じられた世界」である。表層意識の世界であり、人工世界、「脳化社会」（養老孟司）である。その自我意識で虚妄分別された世界を、親鸞聖人は「火宅無常の世界は、よろづのことみなもて、そらごと・たわごと・まことあることなき」（『歎異抄』）世界であると言われる。しかし、その世界を生み出した人間はそのことに気づけず、その世界を「真実在」と考え絶対化することから「迷い・惑う」ことになり、「苦悩する」ことになるのである。

2・浄土＝人間の思いを超えた世界

それに対して、浄土の世界は、人間の思いを超えた世界である。「無限・清浄の世界」「絶待他力の世界」である。親鸞聖人は、その世界を「真実報土」「無量光明土」といい、さらに「自然の浄土」とも言い表わされている。人間の思い（自力分別）を超えているということは「おのづから、しからしめられる」世界ということ、即ち「自然（じねん）」である。そういう意味で「無為自然の世界」ともいわれる。その世界は、仏教でいう「涅槃の世界」である。

その世界を天親菩薩は『浄土論』の中で。

観彼世界相　勝過三界道　究竟如虚空　広大無辺際。（真聖全Ⅰ・二六九頁）

と表されている。虚空の如く広大にして、辺際が無いという。即ち「無限絶待の世界」であることを述べられている。絶待無限の世界ということは、その中に「穢土・自力の世界」を包んで、根底から支えている世界である。そういう二重構造として世界が成立しているのである。

その浄土真実の世界は、私達人間世界を完全に超えているが、同時にその中に私達は包まれている。即ち「浄土（報土）は私達人間存在を抜きにして存在するのではない。人間の迷い・苦悩が、浄土真実の世界を必要とし、又浄土（報土）が如来によって建立されなければならなかったのである。

八　浄土教の救いの構造

以上のように、「世界」「いのち」「人間」を立体的な二重構造として理解してきたのは、仏教の説く「悟り」或いは「救い」ということがどのようなものとして具体的に把握されるべきかということを考察するためである。

仏教は「出世間」「入涅槃」の教え、浄土教は「往生浄土」の教えである。その理解が一般的に相対的な、平面的な理解になっていることを危惧するものである。「世間」の先に「出世間」、「涅槃の世界」があると考える。「この世」の向こうに「あの世」「浄土」があると考えられている。だから「往生」「成仏」は死後に、即ち煩悩が完全に無くなった後ということになる。それでは大乗仏教が基本的立場として立てた「不断煩悩得涅槃」という世界はどこかへ消えて、いわゆる「部派仏教」的な「灰身滅智」の立場に戻ったことになる。

「入涅槃」とか「往生」ということは、「自力分別の世界」を立脚地とする私から、「絶待他力の世界」を自己の立脚地とする私へと、立脚地の世界が転換することだと私は考える。その転換は、人間の側から起こすことができず、如来真実のはたらきを待ってはじめて可能であるというのが「浄土教の救済構造」である。そのことを端的に表明されているのが親鸞聖人の次の文である。

この一如寶海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに報身如来とまふすなり。これを盡十方無碍光佛となづけたてまつれるなり、この如来を南無不可思議光佛ともまふすなり。この如来を方便法身とはまふすなり、方便とまふすは、かたちをあらわし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまふすなり、すなわち阿彌陀佛なり。この如来は光明なり、光明は智慧なり。（『一念多念文意』真聖全Ⅱ・六一六頁）

浄土教の救済の特徴は、特に「世界は二重構造」として捉えた時、「絶対真実の世界」即ち「人間の思いを超えた世界」と「相待分別の世界」即ち「人間の思いが造り出した世界」との間の断絶をつなぐ仲保者のはたらきを明確に立てるところにある。その仲保者として「阿弥陀佛」（＝方便法身）を立て、そのはたらきが「絶対真実の世界」から出てくるとするところに特徴がある。その仲保者の存在を明らかにしたものが『大無量寿経』に説かれた法蔵菩薩の物語である。そのことを端的に示されたのが上記の文である。

そこに誓願成就の救いのはたらきが「南無阿弥陀仏」という名号と救いの場としての「真実報土」である。この成就によって十方世界の一切の衆生が救われることが成り立つ。そのことを二つの図で表示して考察したい。

図1は他力廻向の救いの世界を私なりにイメージして表示したものである。「絶対真実の世界」（真如・一如・法性

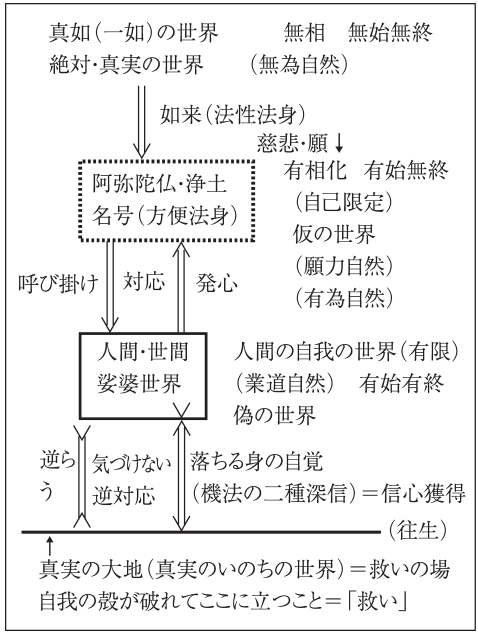

図１　浄土教の救済の構造

法身）が、真実の智慧と慈悲でもって苦悩の人間を救おうと思い立ち、自分の世界（立脚地）を飛び出して（＝南無）、発願修行して、自己限定し有相化したのが「阿弥陀佛は自然のやうをしらせんれうなり」とある。それは「願力自然」の世界であり、「有為自然」の世界であり、又「方便法身」である。それが「南無阿弥陀仏」の名号と「真実報土」である。迷いの人間に認識できる相（すがた）をとり、「お前の生き方は真実に背いているぞ」「真実のいのちの世界に目覚めよ」と呼びかける。呼びかけられる人間は、自我の堅い殻でバリアを張っているから容易には目覚めることがない。むしろ自分の考えを絶対として、そのことが迷いの、苦悩の根源であることに気がつかない。そういう世界を「業道自然」の世界という。「生死輪廻の世界」であり、「偽なる世界」である。

その生き方が完全に行き詰った時（絶対否定・自力無功の信知）はじめて、私達に如来の「念仏」の呼び声が聞こえてくる。自我の殻が破れ、真実の呼び声が届いたのである。そこに「いづれの行もおよびがたき身」「地獄一定の私」という自覚が与えられる。その自覚を表明したのが善導大師の二種深信釈である。

二者深心、深心者、即是深信之心也。亦有二種。一者、決定深信自身、現是罪悪生死凡夫、曠劫已來、常流転、無有出離之縁。二者、決定深信彼阿彌陀佛四十八願、攝受衆生、無疑無慮、乘彼願力、定得往生。」（『観経疏』真聖全Ⅰ・五三四頁）

ここに立った時、図らずも「落ちるまま」（機の深信）に「真実絶待の世界」に摂取されている（法の深信）のである。それが「如来の救済」である。自我の殻が破れてはじめて、「自分の思いを超えた世界」（真実の浄土）があったと気づくのである。その自覚が「信心」である。そこに「真実のいのちの大地」、真の立脚地をたまわるのである。

いま述べたことを一つの譬えで図示したのが「風船の喩え」（世界は二重構造）という「図2」である。

丸い枠の中が「風船の内側」、そこが「世間」であり、ゴム風船で閉ざされた世界である。私達はその中を生きている。そこは人間が自分の思い（脳）で造り上げた世界である。私達は、特に現代社会は、その「風船の内側」の世界を必死になって大きくすることに励んでいる。そうすることが「幸せになる道」だと信じて。しかし、実はその「風船」をどんなに大きくしても、人間の力（自力）では「風船」の外に世界に出ることができない（＝自力難行という）。

もう一つ注意すべきことは、「風船」は宙に浮いていることである。それは私達の「いのち」が「真実のいのちの大地」を失っている。即ち「いのちの根」が切れていることを意味する。だからその「いのち」は一人〳〵バラ〳〵である。縛がりを失っている。「共生のいのち」の大地が無い。そのことに無自覚で、人間の力で道が開けると思っている。

それに対して、「風船の外側の世界」は、宙に浮いている「風船」を包み、支えている。その世界が「人間の思い

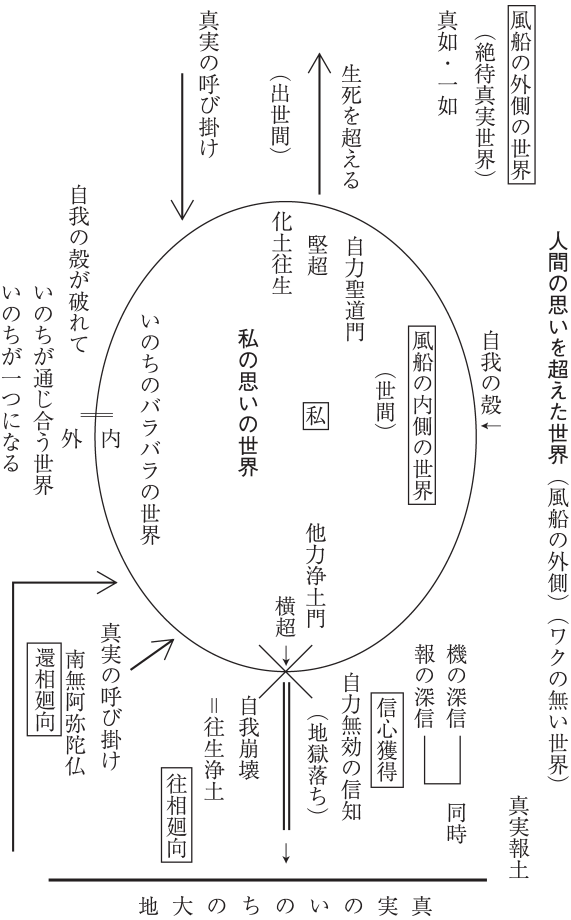

図２　風船の喩え（世界は二重構造）

を超えた世界」「絶待真実の世界」「無限大に開かれた世界」である。仏法では「出世間」「浄土」「涅槃」「仏・如来」の世界という。

「仏陀」とは「目覚めた人」。それは人間の思いを超えた世界がある（＝風船の外側の世界）ことに目覚め、同時に「真実の自己」に出遇った人の謂いである。

「往生」とは、「風船の内側の世界」を超えて「風船の外側の世界」（浄土）へ出ること（往相廻向）。その世界は「真実の信心」によって開かれるのである。従って「往生浄土の人生」とは、「風船の外側の世界」を自己の真の立脚地としていただき、この「風船の内側の世界」（世間）に身を置いて生きる私に成ることである。それが「現生正定聚」ということであり、そういう生き方を親鸞聖人は「還相廻向」の世界といわれたのである。それが「不断煩悩得涅槃」の世界である。

自我の崩壊が起った時、私達は「地獄落ち」のまま、同時に「風船の外側の世界」（浄土）に触れる。浄土の大地をいただく。そこから「いのち」が生じ、そこへ「いのち」が帰って行く「真実のいのちの大地」（畢竟依）である。そこに立った時はじめて、私達は真の独立者・自由人となる。「真実の自己」の誕生である。そこに立ってはじめて「大地」と共にある自己の「いのち」に気づくのである。それが「往生浄土」であり、「真実の救い」である。そこは「いのちの一（いち）なる世界」であり、「共生のいのちの大地」である。私達のバラ〳〵のいのちは、そこではじめて一つになり得、またお互いに「通じ合う」ことができる。そういう世界を私の上に開くのが、親鸞聖人が明らかにされた「浄土真宗の救い」であるといただくものである。※紙数の関係で、「註」省略します。